

玉林院旧伽藍にみる小書院の造営とその変遷について
近世大徳寺山内塔頭における伽藍と平面構成に関する基礎的研究

About the erection and changes of the small drawing room of *Gyokuri-in* old Buddhist temple
Fundamental study about the Buddhist temple and plane of a semiautonomous subtemple of *Daitoku-ji*

○中村林太郎², 重枝豊¹

*NAKAMURA Rintaro², SHIGEEDA Yukata¹

The head priest's residence seen in a Zen temple descends from China with Buddhism, and carries out original development in Japan later including the element of a book. A head priest's residence is the multifunctional main construction which consisted of sets of room. When following changes of a head priest's residence, I thought that the comprehensive research also in consideration of relationship and development with a circumference building was required. In this paper, the *Rinzai-syu* sect group *Daitoku-ji* semiautonomous subtemple erected from the medieval times to modern times is taken up, and it aims at performing positive consideration about the relationship of a head priest's residence and a circumference building.

1. はじめに

禅宗寺院にみられる方丈建築は仏教とともに支那から伝来し、その後日本的要素を包含しつつ日本における独自の、特徴的な発展をしていく。平面構成は2列三室の六つ間取りを基本とし、室それぞれに個々の機能を内包しており、方丈は室の集合で構成された多機能的主要建築といえる。また、方丈の周囲には庫裡や書院、茶室等が造営され、方丈は周辺建築物と有機的に組み合わせられており、禅院伽藍はその一連した建築複合体を中心に形成される。方丈の変遷を追う上で周辺建築物との関係性とその発展も考慮した包括的な研究が必要であると考えた。

本稿では中世から近世に造営された臨済宗派大徳寺塔頭を取り上げ、方丈と周辺建築物との関係性についての実証的な考察を行うことを目的とする。

2. 既往研究

川上貢は塔頭の建築を機能的にみると儀礼空間と生活空間に分けられるとし、方丈は「塔頭の2つの機能の中間的存在」であるとしている。塔院的塔頭から菩提寺的塔頭へ移行する際には昭堂(墓塔)の意義が失われ、方丈に尊像を掲げることでその機能を代用し、方丈は塔頭の儀礼空間に傾倒、方丈の本堂化がなされるとする。また小書院については方丈内の大書院との関連性について触れているものの小書院と方丈自体の関係性についての論述は乏しい。

3. 塔頭について

支那では僧が示寂すると墓塔(卵塔)を建て、これに覆屋をかけたものを塔院と称した。一宗一派の開祖としての高僧の塔院を一般僧のものと区別するために塔頭

と呼ばれた。また、隠退した僧の居住として庵居が設けられた。日本では庵居の永続性を図るために塔頭と結合し、塔院としての塔頭と庵居を併せ持った独自の塔頭が形成される。塔頭は室町初期には五山十刹の禅院に多数造営されるが、外護としての室町幕府が守護大名の反乱によりその権威の維持が困難になると地方の大名や富豪の商人を外護者に頼り、経済的困難を切り抜けようとする。そのため室町後期には高僧の墓としての塔院的塔頭から大名や商人のための菩提寺的塔頭にその性格が移行する。大徳寺塔頭では永正期(1504-1520)に創建された大仙院以後の塔頭は菩提寺的塔頭に位置づけられる。

4. 玉林院の概要

玉林院は養安院法印曲直瀬正琳(1565-1611)が月岑宗印を請じて慶長期に創立した。慶長8年(1603)3月に塔頭開きが行われ、創建当初は正淋院と呼ばれたが慶長14年(1609)2月の火災前後に玉林院に改号している。慶長の火災では院内のほとんどの建築物が焼失する。被災後まもなく再建工事が行われ、元和7年(1621)までに方丈、玄関、庫裡、茶堂の再建をほぼ終えていた。慶長の火災以後玉林院内での大規模な火災の事実は確認されていない。明治期に書院と庫裡が破却され、現在方丈、居間、茶室が残る。

5. 検証方法

玉林院の伽藍に関して4枚の古図が残されており、古図から慶長の再建から江戸幕末までのそれぞれの時代の院内の平面構成が確認できる。古図にみられる伽藍の平面構成から方丈と小書院の関係性について検証する。

1 : 日大理工・教員・建築 2 : 日大理工・院(前)・建築

6. 古図による玉林院旧伽藍の検証

6-1.慶長～元和

図1は玉林院の慶長の再建から元和7年(1621)までの院内伽藍の様子を記している。小書院は造営されておらず、方丈背面に「四畳敷」「眠蔵三畳敷」があり、「書院」と隣接している。方丈背面の二室は眠蔵つまりは院主の寝室であり、書院は院主の日常生活の室であったと考えられる。

6-2.慶長～元和(計画)

図1の古図上には貼紙で小書院と小庫裡が記されており、小書院・小庫裡造営に際しての計画段階での図とされる。小書院は四畳半三室で構成され、小書院の東に小庫裡が隣接する。

6-3.元和～寛文

小書院・小庫裡をはじめ居間、文庫、土蔵などが造営される。小書院は十畳敷と八畳敷の二室で構成されている。十畳敷は床の間を設け、炉が切られる。小書院の北方に院主の居住のための居間が設けられており、小書院は院主の居住の機能から離れ、炉や床の間をもつことから訪客のための接待の場と考えられる。

6-4.寛文以降

寛文11年(1671)は開祖月岑宗印の五十年忌であり、その遠忌に間に合わせるように仏間廻りの改造が行われ、方丈背面の眠蔵はその機能を失っている。

7. まとめ

以上から院内伽藍の造営の変遷をみると元和7年(1621)までに方丈・庫裡が再建され、その後院主の居住としての小書院が計画される。しかし、居間が造営されたことで小書院は訪客のための接待の場として建てられる。寛文11年(1671)までには方丈仏間での仏壇の拡張により眠蔵が寝室としての機能を失っている。

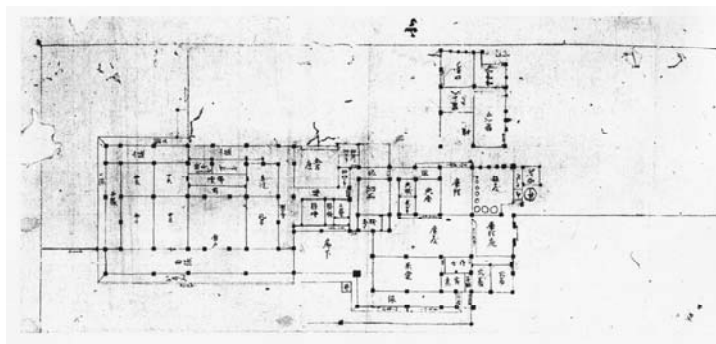


図1 慶長再建当初伽藍

方丈から廊下を介し、庫裡・茶堂へ至る。再建に際しては焼失以前の平面構成を踏襲したとされる。

8. 考察

伽藍変遷の中で院主の居住が方丈から分離され、また居間の造営により小書院が接待の場としての機能をもつ。17世紀中期頃に臨済宗派寺院では方丈の本堂化が進められる。その要因として諸塔頭の仏間廻りの改造があり、大徳寺塔頭玉林院もその傾向がみられる。小書院、居間の造営による方丈の機能を分離は方丈内の機能の簡素化、画一化であり、このことは方丈の本堂化を示す一因ともいえる。

結語

川上は塔頭伽藍の昭堂(墓塔)の喪失から方丈の本堂化が述べたが、本堂化の傾向は小書院を含む方丈の周辺建築物の平面構成の変遷からも明らかにすることができる。今後、他の大徳寺塔頭についても検証を進めたい。

参考文献

- (1)川上貢：「近世的塔頭方丈成立過程の考察」,日本建築学会論文集(47), 114-123, 1953-12-25 社団法人日本建築学会
- (2)川上貢：「大書院と小書院 - 大徳寺塔頭の場合 - 」, 日本建築学会近畿支部研究報告集(3), "404-1"- "404-6", 1963-02 社団法人日本建築学会

図版引用

図1.「重要文化財玉林院南明庵及び茶室修理工事報告書」京都府教育庁指導部文化財保護課,1980.2

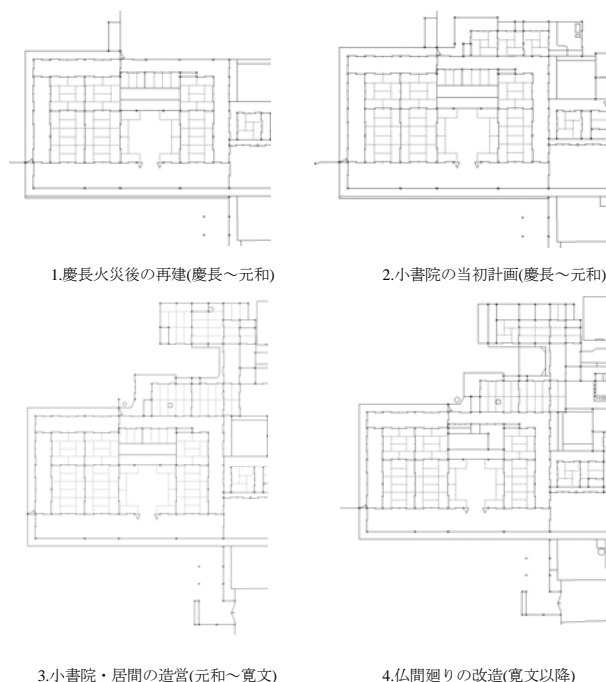


図2 各年代の伽藍

慶長 (1596-1614)、元和 (1615-1623)、寛文 (1661-1672)